

非暴力平和隊・日本 (NPJ) ニュースレター

第 30 号 2009年9月11日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1 - 21 - 7 静和ビル 1 階 A 室
Tel:080-6747-4157 E-mail:npj@peace.biglobe.ne.jp
Fax:03-3255-5910 Website:http://np-japan.org/

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

▪ 巻頭言 『試練を迎えた NP』 事務局長 ーメル・ダンカン事務局長を迎えてー	事務局長 安藤博	2
▪ スリランカ訪問雑感	共同代表 大畑豊	6
▪ スリランカ訪問報告	理事 大橋祐治	9
▪ 夏季カンパ・寄付お礼	事務局	13
▪ 非暴力連続講座「東アジアの若者の ウェブを憲法 9 条から」報告	理事 大島みどり	14
▪ 国際理事会報告 (6月23日)	国際理事 阿木幸男	16
▪ 東京を離れ、初めての田舎暮らしを 実践し始めて	理事 青山正	18



バティカロア職業訓練校の新ホール祝賀会で作品を販売する少女

社会の「目」としての働きをするわけですから、現地政府にとっては、「外」から入ってきたわずらわしい存在であることは避けられません。

ダンカン事務局長は、内戦がともかくも終わっているこの段階でスリランカに築いた足場を維持することは、「剃刀の刃渡り」のようなきわどいものであると語りました。これは、「外」から入ってきた存在（プレゼンス）を、暴力を食い止める＜非暴力平和＞の強みとして活かそうとする NP の創設以来の宿命といえるでしょう。

問題は、そうした＜非暴力平和＞の理念をどのようにして地に足のついた活動にしていくかです。和平の定着には、結局政府がその方向に向かわねばならず、そうなるように市民の力をはたらかせようとしなければならないわけです。そのことを海外から入ってきた市民として、ビザ取得や国内・地域での活動に対する現地政府の了解を合意文書としてまとめるといったかたちで、政府と一定の合意を得なければならないのです。

わたしたち市民自体では、平和を作り出し持続させるための制度を運営することはできません。結局は、各国政府がすることです。したがって、＜非暴力平和＞を現実社会で実現していくためには、この理念を掲げるだけでなく政治の現場につなげる営みが不可欠でしょう。

ダンカン局長と NPJ メンバーとの懇談会のなかで述べられたことのなかから、NP、

NPJ の今後の活動に大きな意味を持つと考えられる事柄を以下に記します。

【ダンカンと NPJ メンバーとの懇談会】から
(2009/7/12 日曜日 14:00-17:00、
於 NPJ 駿河台事務所)

ダンカン：

スリランカでは大変な危機的重要な時に直面しています。剃刀の刃渡りをしている感じです。今、人道的危機が起こっています。どの情報を信用して良いのなかなか判断し難いです。ですが、2 万人が殺されたと大体分かっています。そして、医療が必要な人も 2 万人います。難民キャンプのようなところに 30 万人います。

ですが、NP はやはり国内に居続けようと、昨年秋決めました。我々にとっては、できるだけに北の方に移って、ヴァブニアに強硬に入っていくというのが選択肢でした。しかし、そうしていたら、私達国際ピース・キーパーは国外追放になっていたでしょう。そうしたら、現地の人には保護されなくなっていたと思います。ですので、政府とも少しは協力しなくてはいけないと思いました。

それは一つは政府との合意文書 (MOU) の合意のもと協力していくということです。もう一つは、出来るだけヴァブニア地域に入っていくということでした。今でも、政府とは交渉をしています。

活動内容はキャンプの中の人々の保護、そうしたところに拠点を置く人権監視団体の支援。また、キャンプの中の人達が自分達で監視、報告活動をやっていくような訓練をさせること、政府が約束したことが実際にひとつひとつに行きわたるようにするため

の、グループと個人の信頼構築。そして、地元の人達が基本的なサービスをやるため「同伴」活動を行うこと、また子供達への「同伴」もしてあげることと考えています。私達が提案している合意文書案に対して、スリランカ政府の当局者から返事がこないで毎日待っている状況です。

・・・・・・・・・・・・・・・・

(以下、質疑)

大橋：スリランカは現在の厳しい状況の中で、NPとしてスリランカに2年以上活動することを考えているのですか？

ダンカン：2年以上滞在するつもりです。状況をみていると、2年以上になると思います。それだけ必要があるので。私達が合意文書を交わそうとしている相手は、災害対策と人権を扱う省庁です。

安藤：非暴力平和隊が党派性を持たないという基本方針(Non-partisanship)と、スリランカに居続けられるようにすることとの関係について聞きます。スリランカに出かけて行ったのは、戦っている2つの当事者がいて、その間に入って行くということであったわけですが、今や当事者は1つしかない。従って政府にある程度従順でなければ、居ることさえ出来ないだろう。その関係をどのように処理していくのでしょうか。

ダンカン：このディスカッションの初めに、私が「剃刀の刃渡り」と言ったのは、まさにこのことなのです。もちろん政府に少しは協力してもらうように寄っていくが、だからといって、原理を曲げることはしません。スリランカ政府からみたら、私達は味方だと思われていない。近いとは思われて

いないはず。同時に従順になるとまでは行かないとしても、国に居続けようとするには何らかの関わりを保っていかなくてはいけない、そのバランスが非常に難しいです。超党派、党派に寄らないということは、二つの当事者が戦っている時に中立であるというだけではなく、その暴力に対して、何らかの助けを必要としている人達を等しく助けられるような能力を持つということも含まれます。

安藤：NPが活動を続けられなくなり、スリランカを去らねばならなくなった時のこと、特にスリランカ人の現地のスタッフの身の安全について。NPが去ることになったら、その現地人スタッフの将来はどうか、何らかの対応策が用意されているのでしょうか。

ダンカン：それこそまさに、何故我々が現地に踏みとどまることに全力を上げ、そのために、懸命に政府と関わりを持つとしているかを物語っています。私達が出て行かなくてはいけなくなった時の、ローカル・スタッフのセキュリティーの為の手続きとか、ネットワークも考えています。でも、私達が去ったら危険な状況になります。

奥本：NPを辞める現地活動メンバーが、離任に当たってNPに提出する退任レポート(Exit Interview)は、どの程度まで本部、あるいはディレクター達に届くのでしょうか。正式にはNPの中でシステムとして、どう処理されているのですか？レポートには、沢山の知識や Know-how が書かれていると思うのですが。

ダンカン：退任レポート(Exit Interview)は、プロ

ジェクト・ディレクターが目を通し、その次にトレーニングの開発を担当している Capacity Building Director に渡されます。ですから、最初の段階としては、ジャン・パッションに提出され、ティム・ウオリスに渡り、その二人が、私が注目すべき要点を指摘してくれます。その後、Capacity Building Director のフィルが、今後のトレーニングに活かせるように検討します。

フィリピン・プロジェクトに関して、人間関係上の問題があったことは私も承知していますので、幾つもの対策が現在なされています。私もあちらへ赴いた際には同じように情報収集します。更に、人事関係を専門とする人を雇って、ミンダナオでの人事問題に対処してもらっています。

徳留：私自身の退任レポートに関してですが、私が自分のレポートに出した課題の一つは、マネジメント能力の質の向上でした。

ダンカン：そして、あなたも、我々が開発したインターンのトレーニング・プログラムに参加してくることを望んでいます。あなたのレポートに関しては IGC で取り上げられて、ティムと私と IGC で 1 時間直接話しました。そのレポートが元 FTM により書かれてはいましたが、本来のクレーム申し立ての手続きが踏まれていませんでした。正規の手続きではなかったが、内容は非常に重要な課題を含んでいたと思ったので、真剣に対処してきました。手続きに関わらず、あなたの懸念は NP の上層レベルで大変真剣に受け止められたのです。

徳留：マネージメント側が、このような案件に対処するスキルを持ってくれるよう願います。そして、マネージメント側の間人は、特定の人々に影響されて感情的に流されてはならないと思います。マネージメントの人達が、感情に流されずに、ちゃんとプロフェッショナルに仕事ができるようにと望みます。

青山：メルさんの率直な意見を伺いたいのですが、NP を創立する頃と、今の状況は、世界の状況、あるいは、平和の課題も大分違ってきていると思うのですが。NP の活動の手法、あるいは、現地にスタッフを派遣するというやり方、今後も同じやり方で行くべきだと思いますか、それとも何かしら新しいやり方を考えるべきだというふうに考えますか？

ダンカン：先ず初めに、我々変化はずっとしてきています。これは、全て真理に対しての実験だからです。NP の焦点は、非常に明確です。それは、どうやって非暴力市民平和維持をするかということ学ぶことです。それと、暴力に巻き込まれた市民を守るということです。

非暴力平和維持が一見費用が高くつくようにみえても、他の平和維持の形に比べればずっと経済的です。時に、アドボカシーの団体が、特定の立場をとることがあります。たとえば、スリランカのように。しかし、我々は、そこにおいて、暴力に巻き込まれている人々を守ることをします。



スリランカ訪問雑感

共同代表 大畑 豊

.....

ほぼ満員のスリランカ航空の直行便が夕刻のバンダラナヤカ国際空港に着いた。私にとっては5年ぶりのスリランカ訪問で、前はスリランカ・プロジェクトが始まった2003年に、君島共同代表とピースボートに乗って訪問した。当時NP 第一陣としてスリランカに派遣されていた大島みどりさんらメンバーと、ピースボートのメンバーたちがNPのワークショップに参加する形で交流したのを思い出す。

空港のパスポートコントロールを通るとそこには白亜の仏像が設置されていて、スリランカが仏教の国であることを殊更に強調しているようで、果たして今後民族融和がどのように進んでいくのかこれを見て不安な気持ちになった。

久しぶりに見る空港から市内への道沿いにはドミノピザ、ケンタッキーフライドチキンなどの海外資本のファーストフード店が増え、私がピース・ブリゲイド・インタナショナル（PBI）から派遣されていた頃（1994年）にピザハットができた、というので大ニュースだったのが、今ではマクドナルドもある。当時はなかったFood Cityというスーパーマーケットもあちこちにある。スリランカは、紛争国のなかの経済の優等生、と言われたりするが、まさにそのとおりという感じである。

今回の訪問先については大橋理事の報告にあるので、ここではいくつかの印象をご報告したい。

コロンボから第一の訪問先、トリンコマリーへの道は各所で拡張工事が行なわれ、大橋理事が昨年2月にこの道を通ったときにはチェックポイント（検問所）が何か所もあり、その通過には時間がかかったそうであるが、今回は1カ所もなく、6時間ほどで着くことができた。トリンコマリーで人権団体を訪ね終結後の状況を聞くと以下のような感想を述べた。

『武力紛争が終結した、という意味では歓迎だが、根本的な問題は何も解決していない、終結を受けて経済開発が進んでいるが、自分たちマイノリティ（タミル人）は経済開発を求めたのではなく、60年代から求めているのは人権である、そうした政治的問題を解決しないまま、見ないようにして、経済開発が進められている。（道路状況が良くなっている点について聞くと）その道を通って多くのシンハラ人が移住してくるのではないか、チベットやパレスチナのようになるのではないか、と不安になる。この地区でもジャーナリストが数名殺されており、NPやICRC、UNHCR、SLMMなどの国際団体、監視団がいたときにはそれなりの安心感があったが、それが去ってしまったときは、不安をもった住民は私たちのところに来たが、マイノリティの我々には限界がある。NPには戻って来てもらいたい・・・』

見た目は平穏さを保っているが、武力闘争終結以外の課題は山積されたままというのが実情といえそうだ。

トリンコマリーは国内外から注目さ

れているスリランカ有数の観光名所でもある。開発が急ピッチで進められ、スリランカ空軍が航空便を運行したいとも申し出ている（これも「平和の恩恵」と言えるのか）。昼食に寄ったホテルは規模も巨大でプライベートビーチもあり、国際的にも一流、と言っても過言ではないと思う。

トリンコマリーを発って海岸沿いにムトゥール、ヴァルチェナイと南下したがこの道はひどい状況だった。

ミンダナオに派遣され誘拐されたジャーニールに彼のムトゥールの自宅で会った。予想以上に健康そうであったが、解放されたときには15キロも体重が減っていたそうである。いまだに治療中で、年内は有給休暇という扱いになっているが、その後はミンダナオプロジェクトへ戻る意欲を示していた。

彼に村内を案内してもらった。ムトゥールは漁村で、2004年の津波災害のときも被害にあい、いまだにその傷跡が残っている。漁船は寄付されたりしたが紛争で漁に出ることができず、仕方なく漁船を売り、今度は漁に出られるようになったが漁船（中型・大型）を買うことができず苦勞している、という話しを聞いた。

ムトゥール PC でも、これまでのマイクロ・プロジェクトの継続を要請されるとともに、教育を受けても仕事がなくは子どもたちに希望を与えられない、職業の機会づくりも支援してもらいたい、就職・経済も平和の問題ではないのか、と厳しい状況を訴えていた。

ヴァルチェナイでは地元 NGO の連合

組織ヴァルチェナイ OCPC とミーティングを持った。中には半日かけて会合に出てくる人もいて、不公平にならないよう各地域交代で会合を持つようにしているとのことだ。各地での活動の簡単な報告のあと、NP ヴァルチェナイ事務所とこの OCPC が共同で立ち上げた Early Warning System（早期警戒システム）についての説明があった。これはうわさ話、根拠のない話しが流布されることによってそれが暴動につながっていくことを避けるために、うわさを聞きつけたメンバーがすぐその現場に行き事実確認をし、その結果を携帯電話等で流すシステムだ。例えばタミル、ムスリム地域の境界でタイヤが燃えているだけなのに「死体が燃えている」といううわさが流れるのを止める、などの効果がある。このシステムはかなり成果を出していて、しかも費用もそれほどかからないので、今後のモデル事業にならないか、と印象を持った。

この地域はタミル、ムスリムが混在する地域だが軍や警察などからの人権侵害はないか、と聞くと特にないと言う。会合のあとにメンバーと話していると、あのような質問には、いくら仲間内とはいえ、オープンな場では答えられない、誰がどこで何を聞いているかわからない、みな警戒している、とのことだった。認識不足を反省することしきりであった。

翌日パティカロアで職業訓練校2校を訪問。元少年兵士をこれらの訓練校にNPが同行して連れてきたりしていた。

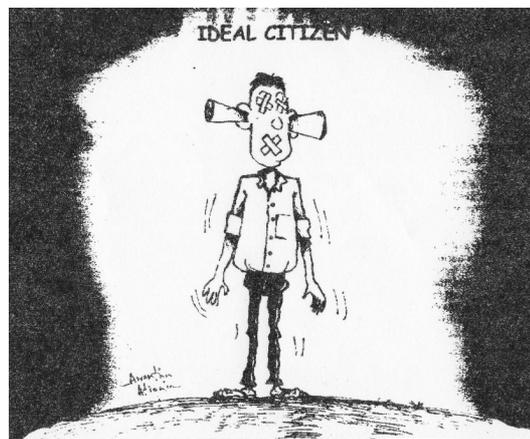
1つの訓練校は定員170人だが、多い時

で元少年兵は30人ほどいたそう。現在は9人、うち7人はNPが同行してきた。もう1校はちょうど新ホールができた祝賀会があり、それに参加したのだが、歌や踊り、劇とにぎやかなものであった。そのなかでコミカルな踊りをする、あどけない少年がいたのだが、その子が元兵士だと告げられ、驚くばかりである。訓練校ではもちろん素性は他の生徒には明かさないでいるが、1年の訓練期間を終えても職が見つかるとは限らず、かと言って地元にも帰れない事情とかもあり、困難な対応を迫られていた。(表紙写真)

今回初めてナショナルスタッフ(スリランカ人スタッフ)とも時間をともにすることができたが、私は彼(女)らは通訳や事務的な仕事を担当しているのかと思っていたが、実は児童保護等の任務も任されていた。共にミーティングに参加するなかで、彼(女)らの優秀さは明らかであった。今回の訪問で気がついたのは、NPが元々掲げていたミッション(目的)は護衛的同行やプレゼンスであるが、現在はコーディネート的工作も多い。これらの仕事はもちろん地元には評価されてはいるものの、当初のミッションとは

兼ね合いはどうか。これらの仕事は優秀なナショナルスタッフも充分できる仕事である。現地代表代行のチームは、NPの活動は進展している、と表現していたが、今後のスリランカ・プロジェクトの方向性を今月中旬に着任する新カントリーディレクターはどう判断するのか、注目していきたい。

コロンボを初めとし、中核的な地域にはラジャパクサ大統領の横断幕、彼と一緒に撮った政治家の巨大なポスターであふれていた。今回の訪問前には彼は王様のような、ということを知っていたが、あるジャーナリストに言わせると、神様だそう。彼の在任中には34人ものジャーナリスト関係者が暗殺され真相究明されていない。また戦闘中の国際法違反、人道法違反もしかりである。私たちの滞在中に福田前首相が記念式典に参加するためにスリランカを訪問したが、それらに関する言及は報道されていない。最大のODA供与国の1つとして、憲法9条を持つ国として、積極的発言を期待したいものである。



「理想的市民」

7月29日、デイリー・ミラー紙

スリランカ訪問 報告

理事 大橋 祐治

■ 7月25日より31日まで、大畑豊共同代表に同行、スリランカを訪問しました。昨年2月の訪問以来、スリランカの情勢は大きく変化し、NP スリランカ（以下、NPSL）も、今年2月にトリンコマリー知事（G. A）の要請でトリンコマリーとムトゥールの事務所の閉鎖を余儀なくされ、トリンコマリー平和委員会（以下 PC）に対する支援を、遠くコロンボとパティカロア事務所から行う体制に変更しました。また、外国人の3年以上の滞在ビザの延長を認めない政府の新たな方針により、ベテランのFTMがスリランカを去り、更には昨年12月就任したばかりのNPSL責任者が今年1月末に突然退任したことなど、現地はこれらの変化への対応に懸命でしたので、日本から詳細な状況を問い合わせることは控えておりました。

5月19日、スリランカ政府は内戦終結を宣言、NPSLの今後の活動方針も決定し、2月より現地で指揮をとっているティム・ウオリス（プログラム・ディレクター：在ブラッセル国際事務局）から現地を視察してはどうかとの要請があり今回のスリランカの訪問となりました。以下に、トリンコマリーPCのプロジェクトの進捗状況を中心に、その実態を少しで皆様が理解し易いよう写真でご報告いたします。ハンデイ・カムとデジカメを両手に持ち、やはりこれと

思う場面はハンデイ・カムでの撮影が多く、それらをお見せできないのは残念ですが、今後の反省点です。

■ さて、NPの活動は同行、プレゼンス、監視、国際社会への発信です。そして、平和活動の主体は現地の平和活動家であり、NPの役割は“making space for peace”活動により現地の平和活動家を支援するものです。

トリンコマリー地域はタミル、シンハラ、ムスリム3民族の人数がバランスしており、かつ、それぞれが農業、商業、漁業などで補完して生活を営む環境にあります。そうした背景があつてか、コミュニティ内外で平和委員会（PC）の潜在的影響力が注目されていきました。NPSLはPCをローカル・パートナーとして位置づけ、PCをエンパワーメントするためPCが推進しようとしているマイクロ・プロジェクトの支援を考えました。そして、2007年初めNPSLの月報を通してマイクロ・プロジェクト支援のための財政的援助を世界のメンバー団体に発信しました。これを受けてNPJは庭野平和財団に助成金を申請し、2007年度「スリランカの平和と人権問題のトレーニング・ワークショップ」として60万円の助成金を受け、2008年度の第2次助成金によりマイクロ・プロジェクトがスタートしました。今回の訪問を通じて、助成金への感謝とともに更なる継続を依頼されました。

訪問先の写真とプロジェクトの概要です。



トリンコマリーPC 連合の人々と

トリンコマリー市街の10の地域のPCのネットワークです。スリランカ到着の翌日早朝にコロンボを出発、3時半ごろ会場（ミッション系）に到着すると30名以上の人々が待ち受けていました。日曜日にもかかわらずです。約2時間の会議でした。このグループとは初めてです。第2次助成金では、ネットワーク作りとマイクロ・プロジェクトの概要をまとめたようです。そのプロポーザルを預かってきました。マイクロ・プロジェクトの内容は、ミニ・ワークショップ、異文化交流、スポーツ・イベント、語学研修、自立のための女性の技術習得など。これらを通して、タミル、シンハラ、ムスリムの民族、宗教間の融和を図ろうとするものです。

このネットワークが受け皿となって、各地域のPCのマイクロ・プロジェクトを企画・支援するとのことで、写真の僧侶とトリンコマリーYMCAが中心に動いています。アメリカ人はYMCAのボランティア。



サリ・サンパルテブ PC (タミル)

昨年2月は村の集会（3PC）を訪問しました。その時、村の長老たちが“私たちはシンハラ語を習いたい。そして、隣のシンハラ村の人たちと理解しあいたいのだ”と熱心に語っていたのが印象に残っています。今回は時間の関係で町中の責任者の事務所で懇談。助成金によってシンハラ語教室を3ヶ月実施したが、資金がなくなり現在は責任者の自己負担で継続しているとのことでした。

.....
 今回の訪問ルートは、コロンボ→トリンコマリー→ムトゥール→ヴァルチェナイ→バティカロア→コロンボで、コロンボから助成金プロジェクトの責任者アリ（パキスタン、前トリンコマリー事務所責任者・写真右端）とNPSLのインターンをしているノルウェー人のマリ（背の高い女性…スリランカで学んだことがある）です。左の写真では、ヴァルチェナイ事務所のマルタ（女性、コロンビア）が合流、NPのシャツを着ているのはトリンコマリーに住んでいるNPSLのスタッフです。



アンブヴァリプ 4 PC

右端の人物は、昨年2月トリンコマリーで開かれたPCの合同会議で熱弁をふるっている様子をハンディ・カムで撮っています。翌月の最初のワークショップに参加、12月の第2回目のワークショップにも参加したとのこと。

タミル、シンハラ、ムスリムのために英語教室を開いています（助成金で一部支援）。写真の奥に薄暗く映っているのは隣の部屋で、ここで乳幼児を持つお母さんたちに粉ミルクを配っていました。ここは村の集会場のようでした。写真には映っていませんが、地方行政の責任者（G.S）も出席し、一体感がありました。



ムルガプリ PC : 子供への平和教育



ムトゥール PC（親委員会）

昨年2月は、掘っ建て小屋のようなPCの事務所を訪問し、英語が堪能な事務局長からいろいろとお話を聞きました。事務局長は小学校の校長先生だったことを知りました。今回訪問したのは、その小学校でムスリムの学校です。ムトゥールはムスリムが多く、それもあってかムトゥール地区のPCは大変組織がしっかりしています。警察署長（シンハラ）が議長、町のお歴々が集まりました。



ヴァルチェナイ OCPC

OCPCとはOrganizations Council for Peace and Coexistenceの略。ムスリムとタミルですが機能的にはPCと同じ。

トリンコマリー/ムトゥールでの写真



ジャリール(右端)宅にて



漁船の獲物…鰯のような小魚



澄みきった海と子供たち



子どもたちは笑顔で学校へ



朝帰りの小型漁船を皆で引揚げ



一方では軍隊による警備も

非暴力平和講座

「東アジアの若者のウェーブを憲法 9 条から」報告

理事 大島みどり

9月5日(土)東京の文京シビックセンターにて、非暴力平和講座が開催されました。講師にお招きしたのは、正木高志さん。正木さんは、九州熊本の阿蘇山麓に「アンナプルナ農園」をひらいて農業を営むかわら、講演や執筆、インド哲学の翻訳、作詞・作曲など多彩な活動を行っています。2007年春分から夏至にかけて、若者たちとともに、木を植えながら島根県出雲から青森県六ヶ所村まで、原子力発電所のある地域を歩く〈walk9／おむすび巡礼〉を企画、実行されました。そして今年2009年9月には、日本・韓国の若者たちとともに、100日間の韓国一周謝罪の旅〈walk9／韓国巡礼〉を行います。

今回の講座は、この〈walk9／韓国巡礼〉の企画を知り、何度か若い方々のミーティングに参加してきたわたしが、この企画が持つ夢や希望、参加者の暑き思いと行動力に共感を覚え、一人でも多くの方々にお知らせしたいと思い、韓国出発直前のウォーク発起人正木さんをお願いして実現したものです。いつもはライブ・ハウスや比較的ラフな雰囲気の中でトークされる正木さんは、非暴力平和隊日本という名前に、「少し硬い(難しい?)」感じの名前の団体名ですね」と笑いながら、ブツダによる作詞(お経)、正木さん作曲によるうたを、ジャンベ(ドラム)

を叩きながらうたい始められました。以下は、お話の内容の要約です。

‘07年に〈おむすび walk〉という、出雲から青森の六ヶ所村まで日本海に沿って木を植えて歩くピース・ウォークをやりました。原発がたくさん立ち並ぶ海外線を歩いたのですが、このとき「もし戦争が起こったら原発がねらわれる」ことを実感しました。これらの原発が戦争で破壊されれば、日本だけでなく中国・韓国も含めたアジアがすべて、何千年・何万年という年月傷つくことになるのです。日本の西側には「日本海」がありますが、この海は韓国や中国では当然のことながら「東海」などという別名で呼ばれています。この海を「日本海」でも「東海」でもないアジア共通の呼び方に命名できないだろうか。「国家」という地球に敷かれたカーペットの上に書かれた呼び名ではない帰属意識、本質的なアイデンティティを人々が持たない限り、「日本海」は共通の名前を持たず、戦争はなくなりません。今回9月から若者たちと韓国を歩くのは、日本人として謝罪をしたい



と思ったからです。謝罪から「国家」を超えたアイデンティティが生まれ、戦争はなくなります。

昨年4月、3度目の沖縄訪問で初めて平和公園を訪れ、大地にぬかずいて祈っ

「国際理事会」報告

(8月25日(火)スカイプ会議)

NP 国際理事 阿木幸男

.....
【注記：スカイプによる国際理事会は、隔月の第4火曜日、日本時間午後10時より開催。アメリカ朝9時（東部時間）スペインでは午後2時、パキスタンでは午後6時など。所要時間2～3時間】

.....
出席：ドナ(米国)、フェイス(米国)、テオ(ラテンアメリカ)、サンドラ(ラテンアメリカ)、オマール(アフリカ)、オッティ(ヨーロッパ)、シモネッタ(ヨーロッパ)、ファルーク(アジア)、阿木(アジア)、エリック(米国)、ルーシー(中東)、メル・ダンカン(NP 事務局長)

欠席：イスラエル(中東)

空席：アジア 1、ラテンアメリカ 1、アフリカ 1

司会：ドナ共同代表

国際理事会は各理事の近況報告から始まり、提案された議題を討議。

【国際理事と事務局スタッフの役割】

各理事は仕事を持ち、様々な地元での活動（市民活動など）に関わっている。理事の年齢は31歳から大半が50代、60代。最高年齢は中東代表理事、イスラエルの79歳。

国際理事は3年任期でボランティア。(阿木の任期は2010年9月まで)

ブリュッセル国際事務局、ミネソタ事務所その他の地域でNP職員として働くス

タッフ（ディレクター以下、地域コーディネーターを含む）は有給である。

現在、国際理事が空席になっている一つの理由は、英語でほぼ毎日、メール受信、発信、隔月の約3時間の英語での会議が負担になっているようである。今年アフリカから新理事が選出され、2月の電話会議に参加。1ヵ月後、辞任の申し出があり、受理。ラテンアメリカからの理事はナイロビ会議の後、2回電話会議に参加後、欠席が続き、2008年秋にペルーのサンドラに交代することになった。

1. ラテンアメリカの新理事候補

.....
テオ理事から理事候補の紹介。プロフィール紹介、推薦理由が述べられ、各理事からの質疑応答後、その候補が英語を話せないことが最大の理由でその候補の選出を見送った。英語ができる他の候補を探すことに決定。(注記：ラテンアメリカの理事はボリビアからのテオ[オランダ人。ボリビア人と結婚。ラテンアメリカに約20年間、在住]。ペルーからのサンドラ[ペルー人。大学に勤務])。尚、アジアの欠員の補充も緊急の課題である。

2. 新国際事務局長

メル・ダンカン事務局長は11月1日をもって、退任の予定。次回の国際理事会(10月27日)がダンカン事務局長の最後の出席となる。

(非公式であるが、阿木がメル・ダンカンに11月以降のことを聞いたところ、以下の返事だった。――家族のこともあり、ミネアポリスに残って生活し、引き

続き、NP の活動に関わって行きたい。
『資金獲得キャンペーン』、『財政担当』
のスタッフとして、留まりたい。)

ブリュッセル国際事務局で働く、新国際事務局長の選考は最終段階にある。
10 月には最終候補のプロフィール紹介、
最終インタビュー結果のメールが国際理事
に流され、10 月 27 日の国際理事会で選
出の予定。

3. ミンダナオ・プロジェクト報告

前 FTM(フィールド・メンバー)と前ロ
ーカル・スタッフからメールで流された
「ミンダナオ・プロジェクト内部運営、
管理問題、代表への問題点、疑問点、等
の是正を求める文章」に関して、スタッ
フから報告があった。

.....
(注記:2007 年 5 月に開始されたミンダナ
オ・プロジェクトはカントリー・ディレク
ターと退任した幾人かの FTM、ローカル・
スタッフとの間で問題があったとされる。
今年 2 月、彼らが文章で NP トップに問題
解決を訴える手紙を出した。この問題の処
理についてである。)

.....
一NP 事務局、国際理事むけのメールは
世界中の NP 関係団体、市民団体、個人
にも転送され、結果的に NP の信頼は傷
つけられた。ミンダナオ・カントリー・
ディレクター、スタッフも心痛の思いと
のこと。NP 本部は今年、4 月からこの
問題の背景調査に当たってきた。ティム
(プログラム・ディレクター)、クリスチ
ン(前プログラム・ディレクター)、メル・

ダンカン事務局長をミンダナオに派遣、
関係者への聴き取り調査(電話、メール
含む)を 4 ヶ月間、実施した。

メル・ダンカン事務局長は 7 月に東京
に立ち寄り、NPJ 事務所で、前 FTM の
徳留さん、および NPJ 理事から、この
問題に対する見解、意見、提言を聞いた。

4 ヶ月間の 3 人の聴き取り調査結果と
しては、A ディレクターにたいする批判
は一方的な側面からものが多いと結論。
国際理事会としては、その報告を承認し、
プロジェクト内部の改善のため、管理部
門スタッフを数名採用したことを評価。
必要な改善策が講じられたと判断した。

プロジェクト遂行に必要な改善策は、
すでに、この問題に関わる両サイドの関
係者、現地スタッフからの聴き取り調査
を基に講じてきた。(ダンカン事務局長)

現在、FTM も増加し、順調に活動は
すすんでいる。(ティム)

一部理事からは、スタッフ配置変え、
などの意見がだされたが、大半の理事は
3 人の調査結果と改善策を承認した。

多国籍の FTM とローカル・スタッ
フが現地で活動するにはチームの信頼関係
は基本であり、問題の重要性にかんがみ
この議題に長時間かけたため、予定して
いた他の 3 議題は持ち越しとなった。問
題の性質上議論の内容の詳細は公表しな
いこととした。

4. NP5 年計画案の試案

試案について議論のスタートを切った。

東京を離れ、初めての田舎暮らしを 実践し始めて

NPJ 理事 青山 正
(ピースネット/市民平和基金代表)

・・・・・・・・・・・・・・・・

個人的なことで恐縮ですが、私は大学に入って以来長年暮らしてきた東京を8月の半ばから離れ、妻の実家である長野県須坂市で農業の仕事についています。

そのため 31 年間創業以来携わってきた印刷の仕事もやめ、また 21 年間月刊で発行してきた市民メディアの「ピースネットニュース」もやめることになりました。と言っても NPJ も含めてすべてをやめたわけではなく、今までとは違う形になりますが、市民活動に関わり続けたいと思っています。

とは言え、長年の東京暮らしから一気に、初めての田舎生活で、しかも初めて農業に従事するという初めてづくしとなり、やはり思うようにはいきません。もちろん田舎とは言っても須坂市は長野市に隣接する人口5万人ちょっとのそれなりの町ですから、小さいですが商店街もあり、大きなスーパーや郊外型量販店などもあります。それでも須坂市の主要な産業はやはり農業であり、私の住んでいるところは田園地帯にあります。

農業と言っても私のやっているのは、りんごとぶどうの果樹栽培と自家用の米作りです。須坂市のある北信地域は果樹

栽培が多いところで、他にも桃や梨、ブルーベリーなどの栽培がさかんです。

8月からりんごの収穫が始まっていて、9月に入りぶどうの巨峰の収穫もスタートし、その合間に田んぼの草取りというハードな作業もあります。基本的に低農薬・有機肥料、そして除草剤は使用していないため、かなり手間がかかります。

まだ新米の百姓1年生ですが、いかに農業が大変かを身をもって体験しつつあります。その割に信じられないほど農産物の価格は安いと実感しています。アメリカや日本での一部の大規模農業を別とすれば多くの農民は労多くして、その見返りは大変少ないものです。農協の買取り価格もそうですが、スーパーなどの直売コーナーでの価格も消費者にとってはうれしいかもしれませんが、本当に低価格です。

それでも何とかやっていけるのは、政府からの補助金も多少はあるかもしれませんが、知り合いや隣近所でお互いの生産物を分け合っていることも大きい気がします。こうした助け合い的なことはとても大事だとつくづく思います。

長年東京という大都会で、平和運動をはじめ様々な市民活動に関わってきて、確かに貴重な経験や多くの人々との大事な出会いを経験させていただきました。でもやはりどこか根なし草的なところがあつたなあとは今も考えています。

NPJ の会員の皆さんは元々大都会にばかり住んでいるわけではないので、「今

さら」と思うかもしれません。しかもまだこちらの生活も始まったばかりで、余裕もなく、つきあいも限られているので、大きいことは言えませんが、まわりを見渡せばビルだらけの都会から、まわりを田畑に囲まれ、遠くに山々が見えるという環境の中で生活し、労働する中で、もう少し地に足のついた考えや活動が生まれて来ないかなと、淡い期待を抱いています。

と言いつつも「晴耕雨読」の生活はまったく無理で、日々の仕事と生活、特に調理担当が私になっていることもあり、日々の献立に頭を悩ませながら、今はすべてに慣れるのに追われて何もできないのが現実です。NPJの皆さんには申し訳ないと思いつつ、今はじっくりと新しい生活と労働のリズムを作っていこうと考えています。

そういう中でも私が以前から関わっているチェチェン問題は、今後も取り組んでいくつもりです。以下のイベントがありますので、ぜひご参加下さい。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

アンナ・ポリトコフスカヤ

暗殺3周年・追悼集会

10月2日（金）午後7時開始
会場：文京区民センター3C会議室
主催：チェチェン連絡会議
参加費：500円

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

アンナ・ポリトコフスカヤ

暗殺3周年・追悼特別上映会

なぜ、あなたは殺されたのか——

「アンナへの手紙」

エリック・パークラウト監督作品(83分)

日時 2009年11月20日（金）18:30～

会場 文京シビック小ホール

参加費：1000円

共催：チェチェン連絡会議／（社）アムネスティ・インターナショナル日本

プーチン大統領が五四歳の誕生日を迎えた2006年10月7日、ロシア政府をもっとも厳しく批判し続けたジャーナリスト、アンナ・ポリトコフスカヤは、モスクワにある自宅のエレベーター内で暗殺された。娘に子どもが生まれることを喜んでいた矢先の悲劇だった。

彼女は、一党独裁に近づくロシアの各地を歩き、衰退する辺境の人々の声を拾い集めた。

そして、世界から見捨てられた、チェチェン共和国への軍事侵攻の実態を暴き、弱者に常に寄り添ってきた。

一人の女性の人生を辿りながら、ロシアの闇に切り込むドキュメンタリー。

彼女の死から三年。

決して忘れられてはならない人が、ここにいる。



非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援して下さる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」をご利用下さいませようをお願いいたします。

◎正会員（議決権あり）

- ・ 一般個人：1万円
- ・ 学生個人：3千円

* 団体は正会員にはなれません。

◎賛助会員（議決権なし）

- ・ 一般個人：5千円（1口）
- ・ 学生個人：2千円（1口）

・ 団体：1万円（1口）

■ 郵便振替：00110-0-462182 加入者名：NPJ

* 通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。例：賛助個人1口

銀行振込：三井住友銀行 白山支店 普通 6622651 口座名義：NPJ代表 大畑豊

* 銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

ウェブサイトからのお申し込み：http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

編集後記：理事の青山正さんが、長年住み慣れた東京を離れ、奥様の実家のある長野県に転居し農業を始められました。新米百姓の体験談をお読みください。日本は食料自給率40%の問題以外にも、農耕地の荒廃により自然の環境保護システムも破壊されています。9月5日、再開された「非暴力平和講座」（大島みどり理事報告を参照ください）の講師をされた正木高志さんも、熊本で農業を営むかたわら、多彩な活動をされています。「人間は自力で生きているのではなく、大自然の営みの中で生かされている存在であることを自覚し、…もう一度自然から学ぶ姿勢に立ち返らなければいけない。」正木さんの「韓国巡礼」という雑誌に書かれた一文です。NPJで産地直送システムを立ち上げ、青山さんの収穫物をぜひ食卓で味わいたいですね。

非暴力平和隊（NP, Nonviolent Peaceforce）とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際NGOで、非暴力平和隊・日本（NPJ）はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために2002年に創設されました。

非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」でも「現実主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

